

こうして等しく苦勞をしてきた兄弟が、今それなりに平穩な毎日が送れるのも、古来「苦は楽の種」という諺にもあるように、戦後のあの苦勞を乗り越えてきた結果だと、しみじみ思うのである。そして、平和というものの尊さ、有り難さを皆が考え、それが続くことを願うものである。

## 我が青春の北朝鮮

茨城県 田所喜美

### 一 出生から終戦まで

#### (一) 生いたち

私は、昭和三（一九二八）年の旧暦一月二十四日に、茨城県土浦市の在の大字毛野の母の遠縁の産婆の家で生まれた。新暦では、恐らく二月末か三月の初めであろうか。役場への出生届は三月二十七日生まれとなっているが、本当の誕生日ではない。高島易断所総本部編纂の「昭和三年家庭暦」を見れば、正しい誕生日が分かるのだが、いまだその機会がない。

母の実家は旧士族の出自であり、父は旧平民の出なので、八十年前の茨城の片田舎では「釣り合わぬは不縁のもと」との諺どおりに、二人の結婚は認められるはずがなかった。私を身籠っていた母は、親や親戚から墮胎を強要されていたが、た

だ一人、熱海市で鉄工所を経営していた叔父が、父と母の理解者であった。

叔父はまず既成事実を作ることだと言って、母をひそかに毛野の産婆の家に預け、そこで私が呱呱こゝの声をあげたのであった。

父は、母の所在を知らされず、母は訪れる人もいない孤独の中で、二十一日目の産屋明きの日にこっそりとその家を抜け出し、常磐線の踏切へ行き、そこへうずくまったそうである。後日、「汽車が来たら、お前を抱いたまま飛び込むつもりだった」とは母が私に語った言葉である。そこを通りかかった小学校の小使さんが、母の挙動に不審を抱き、母を小使室へ連れて行き、事情を聞いて母を懇々と諭したとのことだった。「あのとき、ご馳走になったおじやのおいしかったこと！」と、涙を浮かべて母は私に語った。「あのとき、小使さんが来る前に汽車が通っていたら、二人ともこの世にいなかったのよ」そのときの母の言葉に、私は慄然として息を呑んだ。

その後、間もなく叔父が仲に入って、二人は結婚を許されたが、祝言を挙げることもなく、ひっそりと故郷を後にして東京で世帯を持った。

昭和四年のニューヨーク、ウォール街の株の大暴落は、世界的恐慌となって日本をも直撃した。父が働いていた小さな電球工場では、賃金は電球による現物支給になり、母は私を背負って本所から深川辺りを一軒一軒訪ねて、電球を売り歩いたという。「まあ！ 子どもを背負って可哀相に」とか、「おや、可愛い子だこと」と言いながら、大抵の家では電球を買ってくれたそうである。

間もなく父は肺結核にかかり、故郷に戻って祖父母と同居し、闘病生活に入った。祖母と母の寝食を忘れた看護にもかかわらず、二十四歳の若さで昭和五年十月十六日に父は永眠した。そして、昭和七年一月には母は実家へ戻った。「お前を連れて実家へ戻り、お前をおばあさんに預けて働きたかったが、許してもらえなかった」と母が言っていた。

これらの話は、私が北朝鮮から昭和二十二年一月に引き揚げ、再婚していた母が異父弟を産み、その祝に行つて、母と再会を果たして以来、自由に行き来ができるようになった昭和二十四年以降に、母が私に話してくれたことである。私よりも二十一歳も離れた異父弟とは、今も親しく姉弟付き合いをしている。

## (二) 祖父母との生活

昭和八年四月、私は五歳になっていた。祖父母は小作農業をやめて、バスが通る町中に引越して、小さな雑貨店を開いた。商いは祖母一人で間に合うので、祖父は土建会社に就職し、現場監督になった。読み書き算盤が達者で、まだ四十五歳の働き盛りで体も強健であった。

そして無類の酒好きで、しかも、大勢の人と賑やかに飲むのが好きであった。それで、しばしば土木作業員たちを連れて来ては家で酒宴を開いた。祖母は嫌がりもせずに、店の商品の豆腐や油揚げを煮て酒の肴を作っていた。私は、よく近所の酒

屋へ清酒や焼酎を買いに行かされたものだった。

大声をあげて賑やかに飲んでいるうちに、取っ組み合いの喧嘩になることもあった。「こら！酒は頭へ飲むんじゃないぞ。腹へ飲め」そう言つて止めに入るのは、いつも祖母であった。その気丈な祖母の泣き声で、私は目を覚ましたことがあった。「どうして料理屋なんか上がつて、しかも土方人足を何人も連れて行って高い酒を飲むんだよ。あんたがああ連中を連れて来ても、私は一回だって嫌な顔をしたことはないよ。どうかお願いだから、ここで飲んでおくれよ。」祖母は、祖父の作業着を洗濯したときに、ポケットから額面二百円の請求書を発見したのである。当時、小学校の代用教員と巡査の初任給は、三十円だと言われていた。現場監督の祖父の日給は一円二十銭だったと記憶している。その当時「土方殺すにや刃物は要らぬ。雨の十日も降ればよい」と、酒に酔った土木作業員たちが濁声を張り上げて歌っているのを何度も聞いていた。そんな時代の二百円で

ある。祖母が怒るのも当たり前であった。

昭和九年四月、私は町の小学校の尋常科第一学年に入学した。担任は女性教師で、若くて美人であった。私はその女性教師に母の面影を求めて、まわりついていた。

二学期のある雨の日の休み時間の教室でのこと、体の小さい浅野君が、体が大きくて喧嘩の強い茂木君に殴られて、その場に立ったまま右の腕で両目をおおって泣いていた。私はたまたまそのそばにいた。そこへ入って来た女性教師は、いきなり私の三尺帯を引っ張って言った。当時は、多くの児童は緋の和服姿で通学していた。「こら！ お前だろう、泣かしたのは。事務室へ行って立っていなさい」当時は職員室のことを事務室と呼んでいて、体罰が与えられる場所として、児童たちに怖れられていた。「俺じゃないよ！」と言って、私は自分の机にしがみついた。女性教師は私と机を一緒に引っ張って行ったが、入口の敷居に阻まれて、私と机を廊下へ出せないでいた。その

とき、永作君が口をはさんだ。「先生、田所君がやったんじゃないよ」女性教師は息づかいも荒く、私の三尺帯を握った手を放した。そして、不思議なことには加害者を追及しないままで授業に入った。私は、泣きながら両手で机を抱えて、自席に戻した。二、三年生のときは永作君と同級ではなかったが、四年生からは男女組に分かれたので、また一緒になったが、その時代は格別親しくはなかった。

戦後、二人とも教職につき、彼の方が私より二年早く教頭になり、私の方が一年早く校長になった。『田所君も早く教頭になれるといいんだが』と、主人はいつも田所先生のことを心配していましたが」と、七年前の彼の通夜の席で永作君の未亡人が言っていた。彼の死因は肺気腫であった。

二年生のときには、担任が四人も代わった。格別のこともなく、私は中位の成績で三年生になった。一学期は教頭が担任であったが、自習時間が多かった。

そのころから祖母は、露店で月遅れの小学生向けの雑誌や絵本を買ってくれた。その中の偉人伝などは、二回も読むと頭に入って暗記してしまうのであった。

二学期は、海軍で短期現役半年の勤務を終えた男性教師が、私たちの組の担任になった。当時は、小学校の男性教師は満二十歳で徴兵検査を受けて、陸軍か海軍で半年勤務すれば除隊できる特権があった。しかし、この特権も昭和十九年には廃止された。

私は、この新任教師の指導で成績が向上した。当時の通信簿を見ると、国語は一年生から四年生までは、読方、綴方、話方、総括に分かれ、五、六年生は話方が除外されていた。話方の授業で、教卓の前に立って、祖母が買ってくれた雑誌の中の偉人伝を丸暗記して話して、新任教師を驚かした。全校朝会のように、朝礼台に立って全校生八百人の前で「勝海舟の少年時代」の話をしたことは、七十九歳の今日でも忘れていない。

四年生の担任は男性教師で、授業熱心ではあったが短気な性格で、ささいなことで児童を殴った。だが男子児童のみの学年になったので、殴られても気にならなかった。女子児童の目の前で殴られるのは、小学校低学年生にとっても恥ずかしいことであった。

ある雨の日の昼休みに、二人の児童が殴り合いを始めた。そこへ担任が入って来た。たまたま喧嘩をしていた児童らのそばに、副級長の田口君が立っていた。彼は、喧嘩を制止しないで傍観していた。担任は烈火のごとく田口君を叱りつけ、胸に縫い付けてあった学級役員の印である桜のマークを破り取って、私に渡して言った。「今日から田所喜美が副級長である」田口君は巡査部長の長男で、穏和な性格の持ち主で、とても喧嘩の仲裁などできるような児童ではなかった。私は、こそばゆい気持ちで桜のマークを受け取った。学級の全児童によって選ばれる副級長を、正当な理由もないのに別の児童に替える権利など学級担任が持

っていないことに、私は気づいていなかった。そして、学級担任によって任命された副級長として、四年生を終えたのであった。

五年生になったときには、級友は田口君でなく私を副級長に選んだ。後で分かったことであるが、当時担任は文部省検定試験を受けるために猛勉強中であつた。いわゆる「文検」で、合格すれば中等学校の教員になれる資格試験で、非常に難関とされていた制度である。当然のことで、授業は自習が多かつた。そのうちに私は試験の採点係になり、やがて漢字の書き取りや仮名つけ、さらには分数や少数の計算問題の出題もさせられた。私は得意の絶頂にいた。

二期の役員選挙で私に入った票は、たったの一票。恐らく田口君が入れたのだろう。田口君が副級長に返り咲いた。

翌年の四月、田口君の父親は警部補に昇任して栄転した。今度は、私が副級長に返り咲いた。そして、一年間ずっと副級長で過ごした。

六年生のときの担任の男性教師の祖父は貴族院議員で、多額納税議員であると言われていた。担任は新卒で、茨城師範学校を首席で卒業した。これは後年、同じ年に卒業して教職に就いたが、戦後すぐに退職して地方政界に入り、町長、ついで市長に昇りつめた人から聞いたことであるから、間違いない。

今思えば、昭和十四年は、日本が中国戦線で泥沼にはまり、二年後には太平洋戦争に突入したのであるから、その祖父は先を見通していたのであろう。旧制高等学校、帝国大学のコースのかわりに、兵役免除の特権のある小学校の教員の道を選ばせたのであろう。

母校の創立百二十周年記念誌を読むと、担任教師の転入年月日が昭和十四年三月三十一日で、転入年月日が昭和十九年十二月三十一日になっている。貴族院議員の祖父の影響力も限度に達し、終戦際にペリリユー島へ送られ、全員玉砕を遂げたと帰国直後に聞かされた。

昨年同窓会の際に、私が提案して恩師の墓参が決まった。提案者の私が、平成の大合併で市制が施行された新庁舎に問い合わせたところ、個人情報保護法の規定により、現在の世帯主の住所も氏名も教えられないとの回答を得た。私は常々、尋常科を卒業したら高等科へは上がらずに、水戸市の老舗の呉服店へ丁稚奉公にやると祖父に言われて、私もその心づもりでいた。それを、何回も訪ねて来ては祖父の考えを変えさせてくれた恩師である。墓参はできなくても、ご冥福をお祈りしている次第である。

昭和十五年は、いわゆる建国皇紀二千六百年とされた年である。そのせいかどうかは分からないが、私たちの町にある県立中学校の募集人員が、五十人から倍の百人になった。そのため、受験希望者が六年生五十人の二割の十人に増えた。入学試験の方法も、学力試験が廃されて内申書と面接に変わった。私は面接のときに将来の希望を尋ねられて、「学校の先生になりたいです」と答

えた。入学後に、教師志望は三人で、残りは全員が軍人志望であると聞かされた。

幸い、私たちは十人全員が合格し、希望に胸をふくらませて、茨城県下に十校しかない県立中学校の一つの校門をくぐった。

私は英数国漢の四課目を入れた。東京音楽学校（現東京芸術大学）出身の教師が音楽と美術を担当していた。見るからに芸術家タイプで、授業の合間に石川啄木やミレー、フォスターの話をしてくれた。

昭和十六年十二月八日に大戦が始まり、連戦連勝の日本軍の将来について、警告とも取れる発言をした。翌年には、その教師に替わって軍歌ばかりを教える教師が赴任してきた。ブルドッグというあだ名の、前任者の音楽の授業が恋しく思われた。

祖父は、私を中学校卒業後に小学校の代用教員にしたいと思っていたようだったが、昭和十八年五月一日の夕方、外出から帰宅して二時間後に亡

くなつた。医者を呼ぶ間もなかつた。長年にわたる飲酒のせいで、腎臓と肝臓の機能が失われていたようであつた。

私は中学四年生になつていた。かねがね、自分の身の丈に合わせて、旧制水戸高等学校から旧制東北帝国大学へ入りたいという密かな望みがあつた。英文学を専攻したかつたが、当時の激しい英語廃止論の風潮の中で、ロシア文学が選択肢に入つてきた。だが、ロシア文学が東北大で学べるかどうかについては、何も分からなかつた。昭和二十年三月には、中学校の四年生と五年生が同時に卒業するという発表もあつた。東京外事専門学校（現東京外語大学）に問い合わせたら、受験資格は五年卒業ということで、昭和十九年の時点では四年生には受験資格がないことが分かつた。常識的には、四年生で受験できるのは旧制高校と大学予科と陸海軍の将校を養成する学校だけであるということは分かつていた。

図書室で、旺文社の上級学校受験案内書を読ん

でいたら、満州国立大学哈爾濱学院ハルビンの受験資格が四年修了であることが分かつた。しかも、数年前に創立された建国大学とともに、衣食住学の一切が国費で賄われることも分かつた。ロシア語が主専攻で、中国語とモンゴル語が副専攻であることも分かつた。受験科目は英語、歴史と作文である。「俺の行く学校はここだ！」と心の中で叫んだ。

昭和十八年ころになると、祖母の店では売る商品は皆無に近かつた。砂糖とメリケン粉を露店商に配給することが、祖母の仕事になつていた。祖母は食糧営団（以前の米屋）に砂糖を横流しして白米と交換し、それを公定価格に乗せして売つていた。いわゆる闇商売である。私はそういう祖母に反発し、心の中で「非国民だ」とのしつた。しかし、現実にはそうしなければ生きていけなかつたのだつた。

(三) 満州国立大学哈爾濱学院に入学

昭和十九年一月に受験したときの問題で今でも覚えているのは、英作文で「英米は我々を彼らの



奴隷にしようと望んでいる」があった。奴隷が分からなかったので、召使い（サーバント）に代えて書いた。歴史では、「伊弉諾尊、伊弉冉尊に仮名を付して説明せよ」があり、正答を書いた。作文では「友情について書け」だけで、私は満州国の建国精神である五族協和について書いた。

合格通知が届いたとき、祖母は配給所の商売で十分に生活していけることが分かっていたので、私は精魂を込めて説得した。

出発するとき、祖母は私に五百円を渡し、「私は一人で十分にやっているとけるから、心配しないで持つて行きなさい」と言った。

祖母の饒別を有り難く押し頂いて、玄界灘を渡った。心配していた空襲もなく釜山に上陸すると、「乗車切符の検査」をするとのアナウンスがあった。見るからに紳士然とした中年の男が、私に近づいて来て言った。「検査は、ずっと向こうの方でやっているらしい。荷物を持って歩くのは面倒だから、私の荷物をここで預かって下さい。あな

たと私の切符の二人分の検査を受けて来ますから」と言うので切符を渡すと、彼は「動かないでいて下さい」と念を押して消えた。しばらく経つと彼が戻って来て「動くなと言うのに動いてしまつて！ 私の荷物はあるだろうな。さつき渡した切符は持っているだろうな」そう言つて、彼は自分の荷物を持って立ち去つた。田舎からぼつと出た私は、いかにも騙し易い少年と見たのだろう。

そばを通つた駅員に話したがらちが明かず、学生割引券がないために、百五十円の大金を払つて釜山から哈爾濱までの切符を買う羽目になった。痛恨事として、今でも忘れられない。新義州の近くで、食堂車からくわえ楊枝で戻る彼の姿を見たが、私は「悪いことをしたのは私です」というように目を逸らした。

満州国立大学哈爾濱学院は四年制大学で、各学年の定員は百人であった。昭和十九年の第一学年入学者の内訳を国籍別にみると、日本国民九十三人（含む朝鮮人二人）、満州国民七人（中国人四

人、モンゴル人三人）である。院長は退役の日本の陸軍大佐、学監は同じく退役の陸軍少将、教授と助教授は白系露人一人以外は全部日本人で、主専攻のロシア語は全部亡命ロシア人講師（含む白系露人の教授）と日本人の教授と助教授が担当した。副専攻の中国語とモンゴル語は、それぞれ日本人の教授と助教授が担当した。ロシアの社会主義革命の直後に、後藤新平伯爵の発案で、哈爾濱市に日露協会学校として創立され、後に哈爾濱学院と校名が変更、満州帝国の誕生に伴い、満州国立大学の名が冠された。私は第二十五期生として入学した。

私は、祖母がくれた五百円のうち、釜山で鉄道切符の再購入に使った百五十円を除いた三百五十円を、郵便貯金にした。北朝鮮の朝鮮人小学校の教師をしている叔父が、毎月十円を送金してくれることになっていたのである。それだけあれば、たまの日曜日に外出して、汁粉や餃子を食べるのに十分であった。だが、結局は昭和二十年の敗戦

の日を北朝鮮で迎え、貯金通帳を持参していなかったため、祖母がくれた金は烏有に帰したも同然の結果となった。

毎日四時間、週二十四時間のロシア語の授業についてゆくのは、容易なことではなかった。二時間が講読、文法、作文で、あとの二時間が会話の授業であった。予習と復習は必須であった。消灯後に、便所の電灯の下で勉強する学生もいた。私にはアレクサンドル・イバノビッチ・ガブリロフという三十歳の紳士とワーニャと呼ぶ少年の友だちができた。日曜日には訪問して、会話力の向上に努めた。

三月末に、学生たちは進級、仮進級、保留、原級留置の四ランクに分けられたが、幸いにも進級組の中に私の名前は掲示されていた。第二学年に進級したものの、脚にむくみができ体全体がだるくなった。学生証を提示すれば、市立病院では無料で診察・治療をしてもらえた。医師の診断は脚気であった。休めば授業についてゆけなくなるの

で、だるい体に鞭打って授業に出ていた。

五月初めに、教務課長名で、日本人学生は六月から哈爾濱学院に接している関東軍の飛行場で、グライダーによる滑空訓練を午後の授業にかえる旨の掲示が出された。脚気は訓練免除かと思つて教務課長に話したら、病院の医師の診断書の提示を求められた。叔父からは、休学して叔父宅で静養するようにとの手紙が届いた。

市立病院と教務課を何回か往復して、八月三十一日までの三カ月間の休学が認められた。デパート「秋林」<sup>チユウリン</sup>で慌ただしく買物を済ませて、哈爾濱市を後にしたのは六月初旬のことであった。

#### ④ 終戦を迎える

叔父の所は、私の病気を治すのに最適地であった。三方を百〜二百メートルクラスの山々に囲まれ、平地の真ん中を溪流が南に向かって流れていた。山から平地に涼しい風が流れていて、暑さ知らずの、まるで避暑地のような所であった。私は、裸足で朝露を踏んで田圃の畦道を歩いた。朝食が

済むと、リュックサックに入れて持って来たトルストイやプーシキンの作品を読んだ。それは「イワンの馬鹿」や「神は真実を見給う」や「スペードの女王」であった。「棺」も読んだ。どうしても訳がまとまらないときには、原久一郎や米川正夫の翻訳書を読んだ。読書に飽きると、川岸を散策した。鮎が早い勢いで流れを上下していた。叔父の釣竿を持ち出し、みみずを餌にして川に投げ入れたが一尾も釣れなかった。故郷の茨城の小川で鮎を釣った経験は、まるで役に立たなかった。夜、ちよつと外に出れば、田圃には無数の螢が乱舞し、時の過ぎるのも忘れて息をのんで立ち尽くすのであった。

几帳面な叔父は、夏休みに入っても日曜以外は出勤していた。官舎から小学校までは歩いて三分ほどの距離であり、昼食は官舎に戻って皆と一緒に食べた。

八月に入ると、担任の森新一教授からの葉書が届いた。九月に復学が可能かどうかを知らせるよ

うにとの、事務的な文面であった。返事は、叔父が次の郵便受領のときに、郵便配達夫に托してくれることになった。重い脚は軽くなっており、むくみも完全に無くなって、いくら押しても凹まなくなっていた。

八月十日だったか十一日だったか忘れたが、昼食に帰って来た叔父が言った。「ソ連軍が日本に宣戦布告をした」と。私には青天の霹靂であった。「すぐ哈爾濱に戻ります」と私が言った。叔父は、「浦塩から清津は目と鼻だ。鉄道は不通だろう」「でも、駅へ行ってみます」私は夢中になって二十キロメートルの道を飛ばした。駅の切符売場には、数人の人が駅員と押し問答をしていた。北へ行く汽車の切符は、発売を中止していた。私は、人々を押し分けて駅員の前に進み出た。「哈爾濱へ戻りたいんですが」。「哈爾濱どころか、ここから北上する汽車はないのです」と駅員が言った。私は、空しくとほとほと来た道を引き返すしかなかった。「関東軍は全部南方へ行っている。残

っているのは、年寄りの補充兵だけだ。もしソ連軍が宣戦を布告したら、満州は一週間とはもつまい」と、大学内で密かに囁かれていたことである。四年生の大学は三年制になり、昨年九月に三年生は仮卒業をして学窓を去った。今年は、徴兵検査の年齢が満二十歳から満十九歳になり、私たちの学年からも既に何人かが入隊していた。中学を卒業すれば、その時点で十八歳である。多くの者が、昭和二十年のうちに満十九歳に達する。昨年の入学に際して、日本人九十三人の入学者のうち、中学四年修了は私を含めて七人であった。残りの八十六人は、遅かれ早かれ、今年中には十九歳になる。三年生は、満州国民と日本国民の病弱者を除いて現役兵として入隊していった。それで、二つあった寮も一つになり、全学生が大学に近い寮に集められていた。それは五月上旬のことであった。八月十六日は、朝から蟬の声がやかましかった。出勤した叔父が、すぐに戻って来た。顔が青ざめていた。「戦が終わった。日本は昨日、無条件降

伏をした」叔父の目は涙で曇っていた。その瞬間、私の頭をかすめたことは「殺されるかもしれない」ということであった。祖母の青ざめた顔が私の目の前に浮かび、思わず眼をつぶった。

## 二 終戦から帰国まで

### (一) 死からの脱出

昭和の初め、我が国の教育界には、児童生徒に自分たちの生活を見つめさせるために、綴方を重視する教育運動が起こった。その運動の進展の中で、投獄されたり職を奪われる教師も出てきた。

勤務先を満州や朝鮮に求めて、海を渡る教師もいた。叔父もその一人であった。叔母から私の祖母への手紙では、都市部の日本人小学校へ勤務している旨が書かれていた。それがいつしか農村、そして山村の朝鮮人小学校に変わっていた。その理由を、叔父は一切私に語らなかつた。後になって、その理由の一つが、叔母の朝鮮語にあったのではないかと思うようになった。朝鮮人家屋の入口に「国語常用の家」という掛札が掛けているのを、

私はしばしば目にした。それは四六時中、日本語を使用している。誠に誉めるべき朝鮮人の一家であることを示すためのものであった。そのようなことが行われていたときに、日本人の校長の妻が、朝鮮人と行き来して朝鮮語が巧みであることが、夫の出世にプラスに作用するとは思えない。だが、叔父は叔母の朝鮮語に文句を言っているのを、私は聞いたことがなかった。

赴任したばかりの若い巡査夫妻も叔父たちも、牛車を提供してもらい、積めるだけの家財道具を積んで勤務地を去ったのは、八月下旬であった。叔父は、郡の中心地の町の知人宅に寄寓するつもりでいたが、途中で日本人は町の日本人小学校に集合させられていることを知り、二台の牛車は小学校の校門をくぐることになった。児童の定員が二百人ほどの学校に、その町とその周辺に住んでいた日本人が収容されたのである。その数は約一千人であった。ここから、この日本人たちが故国にたどり着くまでの、難行苦行が始まるのであつ

た。体育館も教室も、足の踏み場もないほどであった。各自が思い思いに炊事をするので、建物の破目板などがどんどん減っていった。

二週間ほどして、引揚げ帰国の触れが回った。慌ただしく引揚団長を選び班を編成し、三日後には駅の広場に班ごとに集合した。持参できる物は一人リュックサック一個の荷物だけだった。有蓋と無蓋の両方の貨車が用意された。帰国できる喜びで、無蓋貨車が割り当てられても不満の文句を並べる者もいなかった。

だが、引揚列車は次の急行列車が停車する駅に着くと、全部引込線に入れられた。ソ連軍の兵士や武器などが続々と南下していたので、その混雑を避けるためかと思われた。

だが翌朝、警察と代わった朝鮮人保安隊という、日本陸軍の軍服を着た武装集団が列車に乗り込んで来た。民間人になりすまして、元憲兵や警察官を摘発する目的であると称していたが、真の目的は指輪やネックレスなどの貴金属製品や万年

筆、腕時計を強奪することだった。「一時預かる」と言って、預り証も書かないで取り上げた。「元憲兵と警察官を探し出す」と言って、男性に両手の掌を広げさせた。保安隊員は、ゆっくりと時間をかけて彼らの仕事を遂行していた。五日目がきても、列車は引込線に入ったままであった。新しい生命も生まれたが、死人も出た。雨降りにも遭った。握り飯を売る朝鮮人も現れた。

「警察官や憲兵は労働をしていないから掌が柔らかいので直ぐに見破ることができる」と、これが保安隊員の言い分だったが、肉体労働をしている男性は皆無に近かったので、壮年男子たちは戦々恐々としていた。疑いをかけられてもすぐに引つ立てるわけでもない。すぐにそれは強奪の口実であることが分かり、一同安どの胸をなでおろした。

だが、このまま南下もせずに時間を空費してはられない。引揚団長が私の所へ来て、「あなたはロシア語が話せるそうですね?」と言った。駅

に寝泊りして、南下する輸送物資の途中での点検のために配置されている、ソ連兵の力を借りたいというのであった。三人いるソ連兵の一人と引揚団長と私が、交渉役となって駅長室に向いた。団長の懇請とソ連兵の返事を、私が通訳した。話が終わると、保安隊長が言った。「要は憲兵と警察官、特に我々を苛めた特高警察が自首することだ。そうすれば、すぐにも南下を許可する」駅長室を出た私は、叔父たちがいる無蓋車に戻った。ハル濱を発つてから、初めて話したロシア語が通じた喜びは大きかった。その喜びに浸っているうちに、夜の帳とほりがおりました。

私がハル濱行きの切符を買いに行ったとき、「ここから北上する汽車はないのです」と言った駅員が私を探していた。会うと彼は、私に向かつて目配せをした。彼は大きな倉庫の陰で、辺りに人影のないのを確認してからささやいた。「あなたは保安隊に殺されます。逃げるのです。十時のサイレンが鳴ったら来て下さい」彼は私に紙片を渡す

と、足早に立ち去った。私はすぐ叔父たちの許に行き、叔父と叔母を物陰に呼び出した。私の話を聞いて、叔母はすぐに戻ってジャンパーとズボンを持って来た。ズボンの縫い目に、十円札を十枚隠してあると言った。私は、急いでジャンパーとズボンの重ね着をした。

小学校へ収容されているとき、いつの間にか私は中学生たちに囲まれるようになっていた。それで、夜はあちこち泊まり歩いていたし、それは駅の引込線に入れられてからも続いた。私は高橋君という中学四年生のいる無蓋車を訪ねた。頭の中は真っ白で、彼との会話は上の空であった。

十時のサイレンが鳴った。保安隊員が、市街地の巡察に出る時間である。私は駅の裏の駅員官舎に向かった。渡された紙片で、その所在は頭に入っていた。駅員官舎の前に立つと、すぐに戸が開いて駅員が目顔で私を招き入れた。「十時から十二時までは、道という道を全部巡察します。十二時に戻って来たら、すぐにあなたを呼びに来るで

しよう。十二時になったら、あなたはここから出て行くのです。汽車の通る鉄橋には両端に小屋があります。そこには保安隊がいます。ですから、二百メートル西側の人と車が通る橋を渡りなさい。そこには保安隊はいませんし、外出禁止ですからだれも通りません。向う側へ渡ってしまえば、あなたは安全です」彼は私に略図を渡して、その橋への道順を教えてくださいました。彼の妻が、台所で忙しく働いていた。それは、私のための弁当作りであった。それから二時間、彼は朝鮮の未来を情熱を込めて話した。「東洋三国が、かつてのように平和に共存し、お互いに援助し合える時代がくることを望んでいます」と力強く言った。私は黙って彼の話を聞いていた。

柱時計が十二時を打った。「お元気で。無事に日本に帰ってください」彼と私は固い握手を交わした。彼の描いた略図を反芻しているうちに、汽車の通る鉄橋に来てしまった。引き返そうとしたが、小屋の中から雷のような轟が聞こえてきた。

私は、運を天に任せることにした。抜き足差し足で、私は小屋の前を通った。心臓が早鐘を打っていた。鉄橋を渡り切ると、今度は小屋の中からすやすやと軽い轟が聞こえてきた。息を殺して五十メートルほど行って、そこから私は後を見ずに脱兎のごとく駆け出した。道をそれて高梁畑の中の小道を走った。両側の高梁の葉にたまった露が、私の体をずぶ濡れにした。

しばらく進むと高梁畑が終わり、行く手に崖が立ちほだかり、私の進路を阻んでいた。しかし皓々と輝く月光で、岸から蔦が垂れ下がっているのが見えた。私は弁当を腰に結わえ、蔦をたぐって崖を登った。崖の上は平地になっており、蔦が木と木をつないでいた。私は地べたに座り、声を殺して泣いた。祖母を思っていて、いつまでも泣いていた。

それから三日後の夕暮れ、私は凹地にある土饅頭の前のお供物を食べていた。昼間は山の中を歩き、夜は零時を過ぎると鉄道の線路を歩いた。前



方に灯火が見えると迂回して高粱畑の中を進み、明け方になると山へ入って南下を続けた。幸い晴天が続いた。駅員の奥さんが作ってくれた弁当は食べてしまい、山の傾斜の小さな畑の、取り残した茄子や立ち枯れた玉蜀黍を噛った。

飢えた私は警戒心を無くしていた。不意に背後から軽く肩をたたかれ、驚いて振り返った。白い朝鮮服の老人が何かをしゃべり、「ここにいなさい」というように、地面を指してから立ち去った。

「保安隊に密告するかもしれない」と思い、私は観念した。しばらくすると、軍服を着た青年が姿を現した。「心配しなくていいです。私の家へ来てください。もう墓の物は食べなくていいですよ！」と言いながら、青年は私を山の端に連れて行った。線路が見え、小さな駅舎も見えた。「高いポプラの木が見えるでしょう。あれが私の家のポプラです。日が暮れたら、山から下りて来て私の家に泊まって下さい」そう言い残して、青年は山を下りて行った。私は暗くなるのを待って山を

下り、ポプラの木のある家の前に立つと、観音開きの扉が開いた。「今日は秋夕チュソクといい、旧暦八月十五日です。先祖の靈に感謝をする日です」と、温突オンドルの通った部屋で、その青年が言った。「父と妹は、踊りをしに小学校へ行きました」朝鮮人にも徴兵令が適用され、彼は舞鶴の海兵団に入団したとのこと。人格者の教務班長のもとで、彼は全然差別を受けずに軍隊生活を過ごした。それで、彼の一家は密かに日本人難民を援助しているのだと語った。私は、保安隊による銃殺を逃れているだけだということを告げた。「今、我が同胞は熱にうなされているチフス患者のようなもので、正気でないのです」彼が言った。青年と私はその温突の部屋で寝た。

翌朝、米と高粱の混ぜ飯と明太魚とキムチの朝食の後で、改まった顔で彼が言った。「新しい独立朝鮮建国のため協力してくれませんか。横浜生まれの横浜育ちの、母国語を知らない遠縁の青年が帰国したいということにして」と言ったが、私

にとつてはまさに青天の霹靂であった。「すぐには返事できないでしょうから、ゆっくり考えてください」彼は私を一人にして部屋を出て行った。

昼食のときには、彼は何も言わなかった。夕食の後で私は言った。「祖国が私の帰りを待っていると思います」「そうですか？ 私が無理なことを言いました」彼はあっさりと私に同意した。「明日は南下します」私が言うと、彼が明るい声で答えた。「いいですよ。今夜はゆっくり休んで下さい」

## (二) ロシア語の通訳をして

出発の朝、青年は「満州から南に向かう同胞の列車が、この駅に停まりますが、列車が長いのでホームをずっとはみ出します。踏み切りが開かないうちに飛び乗りなさい。屋根に乗っている同胞の中には、あなたが日本人だと分かると、突き落とそうとする者がいるかもしれません。ですから乗ったらすぐに眠ったふりをして、話しかけられなくても返事をしてはいけません」と注意をしてく

れた。私は、青年の妹が渡してくれた、粟と米を握った弁当を包んだ風呂敷を腰に結わえて、別れを告げた。

午前十時少し過ぎたころ、列車が駅に入ってきて来た。私は言われたとおりに、踏み切りから駆け出して列車の屋根によじ上がった。そして立てた膝に頭を乗せて、眠ったふりをしていた。

青年が言ったとおりに、咸興までの六時間も私は顔を上げなかった。食事の輪に私を誘う声も聞こえなかったが、私は眠ったままのふりを通していった。

約六時間後、列車は咸興駅に着いた。私はホームに跳び下りたが、その途端に前につんのめった。咸興日本人世話会では、通訳がいなくて困っていた。私は南下をやめて通訳として働き始めた。ソ連兵と日本人の間のトラブルから、ソ連軍事司令部への陳情など、いろいろな問題があつて多忙であつた。保安部（道庁）の通訳の応援にも狩り出された。

市内には日本人の難民が続々と入って来た。神

社仏閣を始め、会社の社員寮や遊郭は難民であふれた。敗戦病といわれた「発疹チフス」が蔓延するのに、さして時間がかからなかったし、病気は朝鮮人にも伝染する勢いを示した。

十一月に入ると、ソ連軍の野戦病院が隔離病院にあてられ、日本人の医師、看護婦、炊事夫と雑役夫が日本人世話会から派遣された。野戦病院からロシア語通訳一人の要請があり、司令部への陳情のときには会長と同道するという条件で、私が派遣された。隔離病院は元日本軍の陸軍病院であったが、略奪のため病院としての機能はしなかった。まず、ハードウェア作りから始めなければならず、病院長と私は資材集めに東奔西走しなければならなかった。

狂奔すること一週間、まがりなりにも病院は患者の収容を始めた。過労から私がまずダウンし、約一カ月の入院生活を送った。私が回復すると、今度は院長が発病した。三日間呻吟<sup>しんげん</sup>していたが、院長は副院長と私に手を握られて、三十六年の短

い生涯を終えた。

間もなく新しい院長が着任したが、彼は終日事務室にいて饒舌を仕事にしていた。それで私の任務はなくなり、世話会に呼び戻された。私の仕事は、司令部詣での会長と同行する以外に、近隣の工場や鉄道の機関区で働いている日本人技師と、監督者のソ連軍将校の交渉の通訳と、咸鏡北道の各地に散在している日本人を咸興に終結させることで、多忙を極めた。南下する難民を乗せた列車が北緯三十八度線の手前で停車した後、三十八度線を流れている川まで護送したことも、一再ならずあった。最前線でソ連兵に逮捕され、保安署(警察)に留置されたこともあった。東洋と西洋の数の単位の違いから司令官の激怒を買い、数を水増ししたとの理由で、保安署に二週間も留置されたこともあった。

帰国しようとする日本人技師と、それを阻止しようとするソ連軍監督者との交渉がまとまらないうちに逮捕され、何の取調べもないまま、百日以

上も刑務所の未決房に閉じ込められたことが、最大の苦難となった。

たまたまロシア語学習を望む看守がいて、房から私を出して看守詰所で私からロシア語を学んだ。一時間教えると、二、三十分の休憩があり、小さな半径での散策が許された。

有数の資産家になったために、終身刑になった方義錫氏は五十歳くらいに見えたが、刑務所内を自由に歩く特権を享受していた。「体に気をつけて、元気に帰国しなさいよ」会うたびに、私に声を掛けてくれた。この声は、崩れ去ろうとする私の意志を支えてくれた。

晩秋から冬に向かうころ、私は釈放され元山の日本人収容所に向かった。

### (三) 帰国とその後

昭和二十一年十二月中旬に元山港を出帆し引揚船「栄豊丸」は、年内に佐世保港に入ったが、仮痘患者が出たため一月八日まで上陸を許されなかった。

帰って来た私を見て、祖母は泣いて喜んだ。三月に、東京外事専門学校ロシア科編入試験に合格したが休学届を出して、母校の小学校の助教になり、翌年は新制中学校の助教論になった。翌年、教務課から通知があり、学制改革のため大学に昇格するので、昭和二十四年度に復学しなければ除籍になると書いてあった。校長に頼み込んで、週二日の校外研修が許された。学生と教員の二つの身分が四年間続いた。

引き続き教職にあり、公立学校定年退職後は、六年制私立学校の教頭、予備校の校長や非常勤講師を勤め、七十二歳で退職した。短歌では毎日歌壇賞を、小説では長塚節文学賞を受賞する光栄にも浴した。今も短歌を詠み、短編小説の構想に時間を費やしている。